MOVE the NEXT 動かす、次代。広げる、未来。

JIMHニュース

第２号

2020年賀詞会を盛大に開催

上海開催の第7回4極会議と
第11回日中物流技術交流会に出席

「マテハンシステム管理士」講座が修了

国内マテハンシステム生産額、
10%増の1兆5,710億円に

JIMH

2020年賀詞会を盛大に開催，経産省･春日原大臣官房審議官が来賓代表の言葉

1月21日、（一社）日本物流システム機器協会の新年賀詞交歓会が、東海大学校友会館（東京都千代田区）にて開催されました。会では冒頭、土田剛会長が登壇し、以下の要旨で挨拶されました。

土田会長

不透明な情勢下も物流機器市場は底堅く

新年おめでとうございます。昨年は、物流における課題が社会問題として世の中に本格的に認知され、様々な形での物流合理化、省人化の試みがなされた1年となりました。会員各社の皆さまにとりましても忙しい年であったと思います。

景気動向に目をやりますと、世界的な冷え込みが顕著になり、中国のみならず世界的に設備投資意欲が減退した年でもありました。国内経済においても、物流関連こそは好況を維持してきたものの、全体としては手控え感を強く感じた年となりました。

それでは、今年はどうなるのでしょうか。年明け早々に米国とイランの国際問題が勃発したことも多方面に影響を及ぼしかねませんし、続く米中問題がある程度終息しない限り、早期に中国の設備投資が回復することは考えにくいでしょう。

物流関連について言えば、国内の景気低迷が投資余力を減殺するため、物流改善や合理化投資はある程度抑えられざるを得ないかもしれません。しかし全体を見れば、労働力の不足と配送頻度の増加という根本的な課題が解消されない限り、引き続き底堅い動きをするものと思います。

今年は環境負荷低減に注力

次に、以前からお話ししてきました当協会の３つの方針である、「社会に対する自動化・省力化の啓蒙と促進」、「環境負荷軽減を重視した提案」、「グローバル化」についてですが、現下の課題は２つ目の「環境負荷軽減を重視した提案」ではないかと感じております。

最近のお客様の傾向として、SDG's を強く意識した経営を指向されており、現場の人間も商談の中で「その自動化・省力化機器によってどれだけの環境負荷低減の効果があるのか?」と、問われることが増えてきているようです。

当協会としては、これまで事例紹介を中心に活動を継続してきてはいますが、今年は、このテーマをいっそう深掘りし、皆さまのお知恵を拝借しながら会員各社の事業に資するような、目に見える形でのアウトプットがなにがしか出せればと考えております。

＊

会長の挨拶に続けて来賓の紹介があり、来賓を代表して、経済産業省大臣官房審議官（製造産業局担当）の春日原大樹氏が登壇し、以下の要旨でスピーチされました。

日本のリーダーシップで国際ルール作りを

令和初めての新年を迎えました。今年の年明けは、中東での問題をはじめ国際情勢が厳しい中で始まりました。現在の困難な情勢を切り抜けるにあたってのキーワードは、２つあると感じています。

１つ目は、国際関係の中でルールを作り、日本がリーダーシップを発揮しながら引っ張るという姿勢です。日EU経済連携協定やTPP11（環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定）が発効して１年を迎えようという時期にあり、またアメリカとの関係でもこの１月１日に、日米貿易協定、日米デジタル貿易協定を発効しています。

春日原審議官

いずれの協定でも、日本は自由貿易の旗手として成立に導いた状況です。また、RCEP（東アジア地域包括的経済連携）についても最終段階に至って、難しい局面を迎えていますが、今後も彼らとしっかり関係作りを構築していく方針です。我々は多様な価値観を受け入れていく立ち位置を明確にし、ハイレベルのルール作りを進めていく考えです。

従って皆さまにも、こうした協定の積極的な活用を進めていただき、新ルールに関しても、皆さまが担う物流の視点からのご意見を反映させていただくべく、ルール作りに参画していただきたいと考えています

物作りデータ活用にビジネスチャンス

そして、もう１つのカギになるのは、データです。GAFAやBATHが席巻し、ビッグデータの重要性と喫緊性が世界中で急拡大している中、日本の存在感に陰りが見えているというご指摘もあります。ただ我々、経産省製造産業局の立場からは、データは単にデータとして大きいだけでは意味がないと考えています。そのデータをいかに現実の世界に落とし込んでいって、実際の人々の生活にどう活用するのか、人々の生活にどう貢献するのかが重要なのであって、それでこそデータが意味を持つのではないでしょうか。

ものづくりをしっかりと踏まえながらデータを利活用することに関しては、日本のアドバンテージは今も失われていません。先ほどの土田会長のお話にもありましたが、中でも物流システム機器を扱う皆さまは、その狭間をつなぐ重要な存在であり、その意味でむしろ大きなチャンスを手にしていると考えられます。

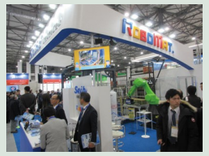
我々も政府の側としてSociety 5.0という新たな社会像を掲げており、皆さまのご意見を伺いながら細部に至るまでしっかり支援させていただきたいと考えています。

＊　＊　＊

総勢200名を超す出席者が集う中、土田会長の2020年度へ向けた方針発表ならびに、それを受けた来賓代表の経済産業省 春日原審議官からの力強いメッセージで幕が開き、和やかな歓談が繰り広げられました。

●2019国際ロボット展に出展

2019年12月18日～21日の4日間東京ビッグサイトの青海・西・南ホールで2019国際ロボット展が開催され、協会会員企業からは西部電機㈱、㈱メイキコウ、㈱山善の各社がそれぞれブース出展され、好評を得ました。

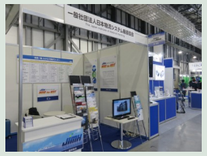

西部電機のブース

メイキコウのブース

また、（一社）日本物流システム機器協会の協会ブースを青海ホールにて出展。JIMH紹介パネル及び会員企業様カタログを展示すると共に、来場者からの各種資料請求、MH関連の問い合わせ等に対応しました。

展示会は海外からの95社を含む637社・団体が合計3,060小間を出展し、全会場には国内外から14万1,133名の来場者を集めました。これは前回と比較して1万1,000人多い過去最高人数とのことです。

山善のブース


JIMHのブース

＊

なお協会では、協会・業界の知名度向上および物流システム機器市場の創造と拡大を狙い、2月19日～21日の3日間、東京ビッグサイト西展示棟にて開催される、国際物流総合展2020 INNOVATION EXPOに協会ブースを出展します。

ブースには協会概要や活動内容等のパネル展示を行う他、JIMH紹介ビデオの上映、さらには会員企業PRの場としてカタログ展示コーナーを設置します。

上海開催の第7回4極会議と第11回日中物流技術交流会に出席

JIMHは2019年10月23日～26日の４日間、中国上海市で開催された第11回日中物流技術交流会と第7回世界マテハン4極会議（日米欧中による定例会議、WMHA）の日程に合わせて、「JIMH中国物流視察団」を企画・主催し派遣しました。これには5名のメンバーが参加し、中国機械工程学会（CMES）、欧州物流機械連盟（FEM）と米国マテハン協会（MHI）との情報交換や交流を進めました。

加えてCeMAT ASIA 2019の視察と、JD（京東）物流の自動化物流センターを視察し、中国ほかの最新マテハン技術情報を入手することができました。以下にその概要をご報告します。

◆日中物流技術交流会

10月24日の午前、CeMAT ASIAの展示会場（上海新国際博覧中心）内のミーティングルームにて、第11回となる日中物流技術交流会が行われました。初めに双方代表者のあいさつの後、中国側２件、日本側２件と合計４件のプレゼンテーションが行なわれました（**写真1**）。日本側の参加者は11名、総勢では約30名の参加者がありました。

写真1
日中交流会のプレゼンの様子

①中国側の発表

・中国重型機械工業協会　物流与倉儲機械分科会　秘書長　滕旭輝氏「自動化倉庫設備の監理原則」
・北自所（北京）科技発展有限公司　副総経理　呉双氏「食品におけるスマート物流の応用について」

②JIMHの発表

・JIMH技術部会副部会長、IHI物流産業システム　渡会靖彦氏「PL法対策ガイドライン」
・椿本チエイン（上海）副総経理　吉村信彦氏「中国における納入事例紹介」

◆第7回 世界マテハン4極会議（WMHA）

同日午後には、第7回目となる世界マテハン4極会議（WMHA、日本・米国・欧州・中国が参加）が、展示会場内のミーティングルームで行われました。

①経済状況と統計の共有

冒頭に出席者の自己紹介のあと、各極の経済状況と統計に関し、それぞれの代表から発表がありました。

写真2
4極会議のプレゼンの様子

②活動報告と規格・規則

前半には前回ドイツの4極会議以降の活動として、４極の代表者からそれぞれ発表がありました。

後半には規格・規則、標準化（Regulations or Standards）をテーマに、ホストの中国側から意見交換の場が設定されました。

日本側からは本件に関し、米国MHIが中心となり、４極で現状使用されている規格・規制をマトリクス的に整理し提出されるはずの比較リストの公表を求めるとともに、５つの規格・規制（①オーバーヘッド・トラベリング・クレーン、②ミニロード、③ラック・棚、④AGV、⑤コンベヤ）を進めるにあたっては、分科会を作って専門の技術担当者ベースで進めるべき旨を提案しました。

写真3　写真4　写真5

写真3～5　CeMAT ASIAのでは注目のAGV系の展示が多数登場

③次回会議について

議論の結果、次回のWMHA会議は2020年３月８日または９日、MODEX（米国/アトランタ）会場で米国をホスト国として開催されることになりました（※注/２月に入り、新型コロナウイルスが世界中で拡散したため、本件は急遽中止となりました）。

本来、次回は日本がホスト国になる番でしたが、2020年は東京オリンピック・パラリンピックで大きな展示会場が使用できないため事前に調整したもので、日本は次々回の2021年１月下旬に開催予定の国際物流総合展でホスト国として会議を開催することが決まりました。

なお４極会議の出席者は合計17名で、内訳は日本（JIMH）６名、米国（MHI）２名、欧州（FEM）２名、中国（CMES）７名でした。また、会議の終了後には４極交流会として、浦東埠頭からのナイトクルーズで、ライトアップされた風景を鑑賞しながら、和気あいあいとした交流の時となりました。

◆CeMAT ASIA視察

翌10月25日午前、一行はCeMAT ASIAの展示を視察しました。日本企業では、椿本チエインと伊東電機が参加、また欧米企業では常連のDematic、Swisslog、Schafer、TGWなどのヨーロッパ企業が出展していました。

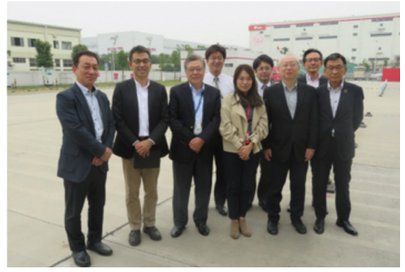


写真6
物流センターをバックにメンバーで記念撮影

今回の傾向としては、シャトルシステムや無人台車によるラック移動システム、コンベヤでは樹脂製のベルトに多数の小さなロールを取り付けた仕分けシステムなどがありました。またこれまでに比べ、中国製品の機械の外観、装飾デザイン等が欧米並みに進化していることが感じられました（**写真3～5**）。

なお展示会場内で10月23日午後、CeMAT ASIAの20周年を記念して、記念セミナーが開催されました。主催団体のCMESから４極会議国のFEM、MHI、JIMHが招待され、各国挨拶の後、７人によるセミナー形式の発表がありました。特別に増設された1,000人規模の屋外会場が満員となる盛況でした。

◆物流センター視察

今回は、中国最大手の小売企業で直販ECトップの京東集団（JD.com）が、壮大な無人物流・配送サービスの実現へ向けて整備している、JD物流センター（第３期、上海市嘉定区興邦路1111号）の仕分けシステムを見学しました（**写真6**）。搬送物の流れは以下の通りでした。

・入荷（小包）⇒バーコードで識別⇒クーカ（ドイツ、推定）のロボット18台でピッキング⇒チルトトレイタイプの小型台車（充電方式）300台で192のシュートに仕分け⇒中型風袋交換用AGV32台で集荷、移動⇒大型AGV42台でトラックバースに移動、積載
・トラックで出荷

この物流センターは、CeMAT会場からバスで約１時間半のところに位置していましたが、なお上海市内であり、近くには上海大学があり、さすがに上海は広いと感じました。

（記）事務局グローバル部長　小松　尚

国内唯一のマテハン専門講座

令和元年「マテハンシステム管理士」講座が修了

JIMHは令和元年６月、第９期マテハン塾「マテハンシステム管理士（１種、２種）」講座を開講、同年11月に修了式を迎えました。同講座は、マテハン機器の機能とユーザーのニーズを見極め、効果的、効率的なシステムを企画・構築・提案できる人材が国内で不足しているとの問題意識からJIMHが開設した、国内唯一のマテハン専門講座です。今回はその実績等について報告します。

前期・後期コースのほか、短期集中コースも用意

マテハン塾では、マテハンの基礎を学びたい方から、マテハンシステム管理士の資格取得を目指す方まで、キャリアやスキルに合わせてコースを選ぶことができます。

６月～８月末に前期コースが東京都内で開講し、受講生９名が参加しました（**図表1**）。受講者は座学を中心にマテハン機器のハード、ソフト、運用について幅広く学習できるカリキュラムをのべ約40時間受講しました。前期コースは、修了時にマテハンシステム管理士補の資格認定を受けられるもので、これがマテハンシステム管理士２種の受験資格となります。

続いて９月～11月上旬には、後期コースを開講し、受講生９名が参加しました。後期コースの受講対象は、原則として前期コース修了者およびマテハンシステム管理士２種資格者です。受講生は、座学のほか施設見学、グループワーク等のカリキュラムをのべ約60時間受講し、マテハンシステム管理士1種取得を目指しました。

このほか、東京で９月末の３日間、大阪では11月上旬の３日間にわたり、マテハンシステム管理士２種の受験資格となるマテハンシステム管理士補の資格取得のみを目的とした短期集中講座も開講しました。東京・大阪で各14名の受講生が参加し、のべ20時間のカリキュラムを受講しました。

このようにマテハン塾では、受講生のニーズに応え、柔軟かつ充実したカリキュラムを用意している点が特長です。また、後期コースでは、受講生のプレゼンテーションによる物流センター構築のコンペを行う斬新なカリキュラムも提供されています。

今回は９月25日にエレコム㈱神奈川物流センターを見学後、受講生によるディスカッションを実施しました。さらに座学で物流センターのシステム構築や利潤創出、ABC分析等の方法を学んでから、受講生を３グループに分け、物流センター構築実践グループワークを実施しました。

図表2の課題が与えられ、３グループによるプレゼンテーションのコンペを行いました。３グループの発表とも素晴らしい出来となり、総評では、「基本に忠実に、人とマテハンのバランスを考慮したシステム構築」「ある企業の新商品を組み込んだシステム構築」「究極に省人化を図ったシステム構築」という高評価になりました。

図表１　第９期「マテハンシステム管理士」講座の開講実績

●第９期　JIMH マテハン塾本講座　前期コース

特01	6/12（水）	13:30～15:00	基調講演 早稲田大学　経営システム工学	吉本教授	AP東京 八重洲通り
単01		15:10～16:10	オリエンテーション他	藤井 唐下	
単02	6/19（水）	13:30～16:00	コンベヤ・ソーター・ 垂直搬送システムの計画、 使用方法	福部 佐々木	京橋プラザ
単03	6/26（水）	13:30～16:30	仕分け・ピッキングシステムの計画、 使用方法	松岡	京橋プラザ
単04	7/3（水）	13:30～16:30	無人搬送車・マテハン系ロボットシ ステムの導入例、技術動向	辻本	京橋プラザ
単05	7/10（水）	13:30～16:30	フォークリフト、パレット＆固定 ラック、物流・マテハンシステムの 安全	泉田	新富区民館
単06	7/17（水）	13:30～16:30	保管システムの導入例、 技術動向	唐下	新富区民館
単07	7/24（水）	13:30～16:30	入荷・入荷検品・運用、 情報システム	三浦・小林	新富区民館
単08	7/31（水）	13:30～16:30	入庫運用・入庫情報システム	三浦・小林	京橋プラザ
単09	8/21（水）	13:30～16:30	出庫運用・出庫情報システム	三浦・小林	京橋プラザ
単10	8/28（水）	13:30～16:30	出荷・出荷検品・運用、 情報システム	三浦・小林	京橋プラザ
	8/29（木）	13:30～16:30	マテハンシステム管理士 2種試験	唐下	京橋プラザ
	11/27（水）	13:30～17:00	発表会＆終了式 （マテハンシステム管理士）		銀座ブロッサム

受講生9名　約40時間」

●第９期　JIMH マテハン塾本講座　後期コース

特02	9/4（水）	13:30～16:30 （未定）	特別講演① 三益食品　ロジスティクス本部	千田本部長 （13：30～ 15：00）	AP東京 八重洲通り
			基調講演 早稲田大学　経営システム工学	吉本教授 （15：00～ 16：30）	
単11	9/11（水）	13:30～16:30	オリエンテーション 物流情報システム①	唐下・小林	JIMH 7階　会議室
単12	9/18（水）	13:30～16:30	物流情報システム②	小林	JIMH 7階　会議室
見01	10/1（火）	終日	物流センター見学 見学施設に関するディスカッション （マテハンシステム管理士 1種レポート）	三浦・松岡 唐下	エレコム
単13	9/25（水）	13:30～16:30	ABC分析実践 自己PRプレゼン発表	三浦	JIMH 7階　会議室
単14	10/2（水）	13:30～16:30	物流センター構築について 物流センターが利潤を上げる方法	三浦・小林	JIMH 7階　会議室
	10/10（木）	10:30～16:30	物流センター構築実践 グループワーク	三浦・松岡 唐下	JIMH 7階　会議室
	10/16（水）	10:30～16:30		三浦・松岡 唐下	JIMH 7階　会議室
	10/23（水）	10:30～16:30			JIMH 7階　会議室
	10/30（水）	10:30～16:30			JIMH 7階　会議室
	11/6（水）	13:30～16:30	セミ発表会	三浦・松岡 唐下	JIMH 7階　会議室
	11/27（水）	13:30～17:00	発表会＆終了式 （マテハンシステム管理士）		銀座ブロッサム

受講生9名　約60時間

図表２　物流センター構築の課題概要

これまでの個別納品に対し、センターでまとめて在庫管理し、顧客店舗へ一括納品するための「物流センター」を構築する。

取扱商品	ドライ加工食品、4,000アイテム
センター通過金額	200億円／年
１ケース単価	平均4,000円
１日の納品店舗	100店、カート納品
取扱量	5百万ケース／年　（14,000ケース／日）
在庫量(約10日)	140,000ｹｰｽ　（3,000パレット相当）

第9期は1種・2種各9名、管理士補28名を認定

こうして第９期マテハン塾のカリキュラムは全て無事に終了し、令和元年11月27日に銀座ブロッサム（東京都中央区）において、マテハン塾の後期受講者による発表会と、前期・後期の修了式が行われました。

発表会では後期受講者９名が３グループに分かれ、マテ塾講師や前期受講者、運営幹事等計26名の参加者を前に、各グループ30分の持ち時間でプレゼンを実施。発表終了後には、講師の三浦先生から「各グループそれぞれに趣があり、短期間で良く纏め上げていました。特に新技術を取り入れたあたりは、年々発表内容も向上していると思います」との所感をいただきました。

第9期マテハン塾受講生とJIMH講師陣

修了式では、JIMHの土田会長が登壇し、「本マテハン塾は営業、エンジニアを問わず大いに仕事に役立ちます。今後ともスキルアップおよびノウハウの取得に精進していただきたいと思います」と語りました。続いて土田会長による表彰・認定書授与に移り、前期最優秀賞、後期最優秀グループ賞には賞状と商品券を贈呈しました。さらに、９名の後期受講生全員にマテハンシステム管理士１種の認定書と賞状が、９名の前期受講生にはマテハンシステム管理士２種の認定書と賞状が手渡されました。

なお第９期全体では、マテハンシステム管理士１種９名、マテハンシステム管理士２種９名、マテハンシステム管理士補28名が認定されました。

充実感溢れる修了生達と土田会長（左端）

受講生によるプレゼン

最後に開催された懇親会では、JIMHの田尻運営幹事長が挨拶に登壇し、「今期は前期・後期、そして短期（東京14名、大阪14名）とも受講生がとても真剣に取り組んでくれて、感想文のレポートにもその成果が反映されています」と総括しました。

JIMHでは、今後も引き続き、第一線でマテハンを「提案する」「販売する」「管理する」人材を育成していくため、「マテハンシステム管理士（１種、２種）」の専門講座の充実化を図りながら、マテハンのプロフェッショナルを輩出していきたいと考えています。

【教育・研修部会】

国内マテハンシステム生産額は10%増の1兆5,710億円、世界4極合計は18兆3,420億円と微減

2018 年版 マテハンシステム統計調査報告書より抜粋

◆調査の目的

マテハンシステムは、物流の自動化や省力化を通じて、産業の活性化、生産性の改善や市民生活の向上に重要な役割を果たすことが期待されており、その中核を担うマテハン業界の振興にはまず、基礎的な統計データが不可欠です。

しかし、従来利用されている統計は、狭義のマテハンを対象とするデータであり、マテハンシステム全体の実態が明らかでないといった問題がありました。

そこで、本調査はそのような背景を踏まえ、関係する業界団体の協力をあおぎながら、より広義のマテハンシステムのデータを収集し、業界の実態を明らかにすること、具体的には、４極会議（日本、米国、欧州、中国）への参加により、グローバルに通用するマテハンシステム統計を継続調査すること、そしてその結果を報告書として情報提供することを目的としています。

〈4極会議・交流会（日・米・欧・中）の歩み〉

2013年１月　第１回４極会議・交流会が米国シカゴ（ProMat）で開催

2014年５月　第２回４極会議・交流会がドイツハノーバー（CeMAT）で開催

2015年10月　第３回４極会議・交流会が中国上海（CeMAT）で開催

2016年９月　第４回４極会議・交流会が日本東京（国際物流総合展）で開催

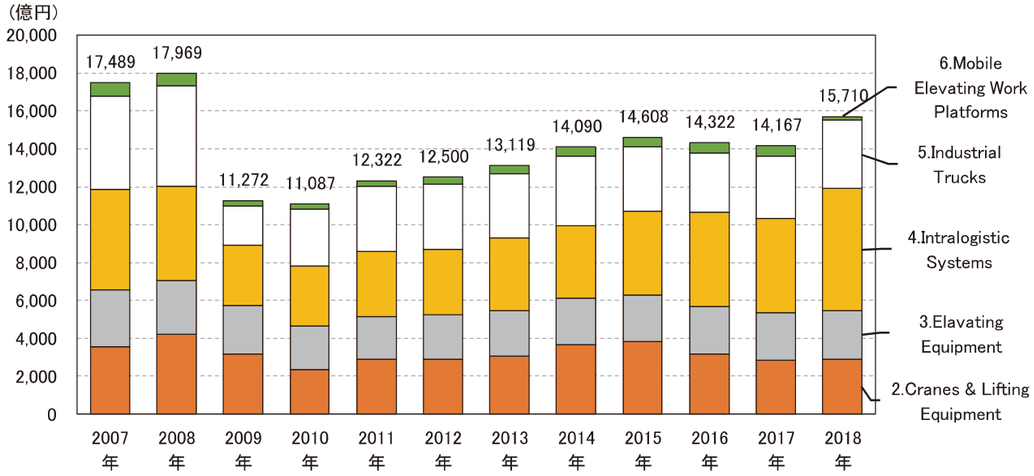
2017年３月　第５回４極会議・交流会が米国シカゴ（ProMat）で開催

2018年４月　第６回４極会議・交流会がドイツハノーバー（CeMAT）で開催

2019年10月　第７回４極会議・交流会が中国上海（CeMAT）で開催

2020年3月　第８回４極会議・交流会が米国アトランタ（MODEX）で開催予定（※中止）

図表１　日本のマテハンシステムのカテゴリー別国内生産金額推移図



◆日本のマテハンシステムの生産額

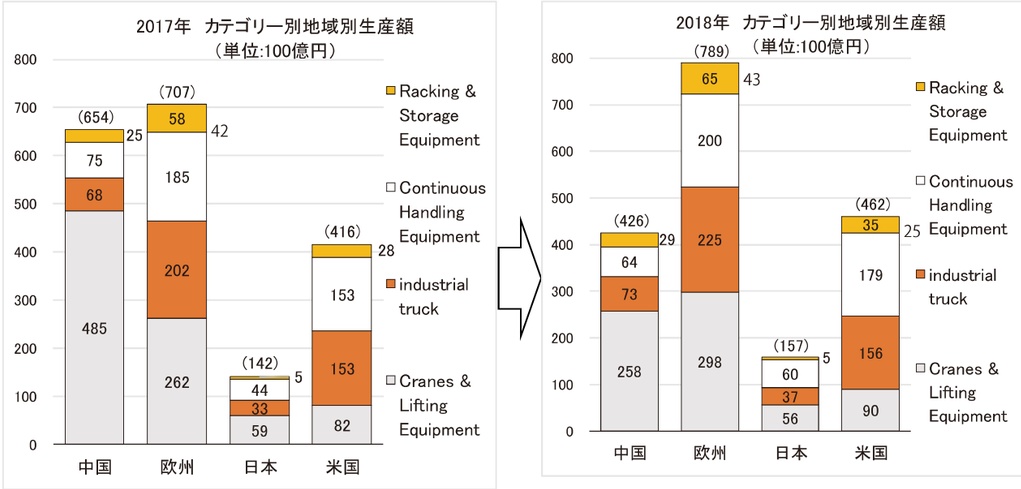
2018年の日本のマテハンシステム生産額は、1兆5,710億円と、前年比10.9%の増となりました（**図表1**）。Intralogistic Systemsの29.7%増、Industrial Trucksの10.2%増をはじめ、前年度と比較可能なすべての分類で増加しました。なおMobile Elevating Work Platformsの数値は集計上減少していますが、これは「高所作業車」の本年度の統計数値が未公表とされ、当該品目の生産額をゼロとしているためです。物流自動化への投資は非常に旺盛であり、Intralogistic Systemsの金額はリーマンショック前の水準を大幅に上回る金額に達しています。

◆4極のマテハンシステムの生産額

日本、米国、欧州、中国の４極の団体から結成されたWMHA（World Material Handling Alliance）では、各国のデータを持ち寄ってグローバルな統計を作成しています。WMHAの統計では4分類のカテゴリーが採用されているため、先の7分類とは異なるものの、カバーする範囲は同一です。

統計データ（**図表2、3**）によると、４極合計での生産額は18兆3,420億円に達しています。前年度までと比べ減少に転じた主な要因は、中国におけるCranes & Lifting Equipmentの金額が大幅に減少（△46.9%）したことにあります。合計金額は為替の影響で年により増減がありますが、長期的には成長傾向にあり、

図表２　20017/2018 年の４極の生産額推移（グラフ右肩は地域別シェア）



図表３　４極のマテハンシステムの生産額

（単位：100億円）

統計項目	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
Cranes & Lifting Equipment	865.1	970.9	1,007.7	895.2	888.6	703.0
Industrial Trucks	320.4	369.5	420.8	407.1	456.3	490.9
Continuous Handling Equipment	328.1	382.2	430.1	417.1	456.3	504.0
Racking & Storage Equipment	89.5	102.6	115.2	108.3	116.3	134.8
１ユーロ（年平均レート）	129.7	140.5	134.0	124.5	126.4	130.9
合計額	1,603.1	1,825.2	1,973.8	1,827.7	1,917.5	1,834.2

注：四捨五入の関係で合計額と内訳は整合しない場合がある。

図表４　４極各地域の生産額

（単位：100億円）

地域	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
中国	601.8	680.0	731.6	662.3	653.5	425.5
欧州	600.5	675.8	686.1	643.7	706.6	789.4
日本	131.2	140.9	146.1	143.2	141.6	157.1
米国	280.2	328.8	410.0	378.5	415.9	462.1
４極全体	1,613.7	1,825.5	1,973.8	1,827.7	1,917.5	1,834.2
１ユーロ（年平均レート）	129.7	140.5	134.0	120.3	126.4	130.9

注：レート換算に伴う四捨五入の関係で、他の集計表と数値が異なる場合がある。

2013年と比較すると14.4%の増加となっています。

なお2018年のデータとしては、日本以外の3極は、2018年1月から12月までの実績を対象としています。

地域別の傾向としては、上記の要因によって中国の割合が2017年の34%から大きく低下していることが大きな変化です。その他の地域を2013年以降で見ると、米国の生産額は2兆8,020億円から4兆6,210億円へと64.9%という高い成長を記録しています。欧州も同じ期間に31.5%の増となっています（**図表4**）。

（記）マテハンシステム統計調査委員会　委員兼事務局　田中　寧、小松　尚

JIMH ホームページをリニューアルします！

■JIMHではこのほど、協会のホームページ（HP）をリニューアルすることになりました。これは2019年3月に実施したアクセス解析の結果を受けて、次のような方針を立て、準備を進めていたものです。

①閲覧者を増やすために、より見やすく、読みやすいページとし、一層の読者増加を狙う

②バナー広告の表示位置を変更し見やすく

…これまでバナー広告はトップページの右端に表示し、2/3はスクロールしないと見えない課題があったため、全ページの最下部にロゴマークをスライドさせる形で目立たせる。またロゴとは別に会員企業名を列記し同社のHPにリンクさせる。これにより正会員、賛助会員の出稿会員を増加させる。

③会員ページの充実

…公開情報とは別に、会員ページに内部の活動成果として制作物等をきっちり管理、保管する

■既に2020年1月末より試行期間としてHPを公開していますが、4月より本公開し、バナー出稿企業を募集する予定です。皆様の閲覧をお待ちしております。　【広報委員会】

▲トップページの画面イメージ

第16回、17回施設見学会を開催

◆㈱IHI 横浜事業所 見学会

JIMHは2019年７月５日、32名の参加者を迎え、㈱IHI横浜事業所にて第16回の工場・物流施設見学会を開催しました。「IHIつなぐラボ」にてオリエンテーションとオープンイノベーションの取り組みの紹介を受けたあと、２班に分かれてバスで移動し、横浜事業所内で耐震実験場、温度成層風洞、AIデパレロボットを見学しました。最後には質疑応答と、ひらめきエリアの自由見学もありました。

今回、初めて大学教授・学生（東京都市大学）に参加していただいたところ、質問も多く出され、交流と物流機器業界の認知により、今後の人財獲得につながっていくことが期待されました。

IHI横浜事業所の見学会

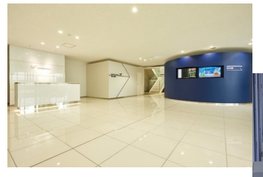
◆㈱椿本チエイン 埼玉工場 見学会

11月８日、日本MH協会様とコラボする形で、第17回施設見学会を㈱椿本チエイン埼玉工場で実施しました。

同社の歴史と埼玉工場の概要について説明を受けた後、M.LABO展示場と生産工場を見学しました。M.LABO展示場は昨年オープンした新しい展示場で、マテハン部門の新商品、売れ筋商品が稼働状態で見学できました。中でもピッキングロボットとラインを組み合わせた展示（コントローラはMUJIN製）やリニソートS-C∞などは見応えのある展示でした。

他には仕分け機のクイックソート、巻取紙のAGV、天井走行軌道台車バンガード、医薬向のラボストッカ150等の目を引く商品郡がありました。

生産工場にて、加工機等の導入経緯も含めて丁寧にご説明いただき、AGVの組立て場、チェーンの製造過程などを見学。主力商品の1つであるジップチェーンリフターの説明も実機を見せて頂きながら細かな説明を受け、大変興味深い工場見学会となりました。



編集後記

■国際物流総合展2020-Innovation Expo-が、2月19日から3日間、東京ビッグサイトの西展示棟1F1、2ホール（合計約1万8,000㎡）で、物流・ロジスティクスの先進情報が収集できる専門展示会として開催されました。展示会では、225社・団体が778小間に出展。内外の最新物流システム・機器が結集され、3日間は好天に恵まれ、予想を上回る約22,000名の来場がありました。

■日本物流システム機器協会は、会員企業様22社の出展を支援しながら、2小間のスペースに協会紹介・会員企業一覧のパネル展示および「動かす、次代。広げる、未来。JIMH設立10周年記念ムービー」を上映しながら教会活動を紹介、約30社から入会検討やカタログ請求がございました。　（広報委員長　田中 寧）

一般社団法人 日本物流システム機器協会
広報誌「JIMH ニュース」第２号
2020 年 3 月 12 日発刊
〒 104-0032 東京都中央区八丁堀 3-3-1-202
TEL 03-6222-2001　FAX 03-6222-2005
http://www.jimh.or.jp/

一般社団法人
日本物流システム機器協会
The Japan Institute of Material Handling

2020.03-01